

共同研究 ● 物質性的人类学（物性・感覚性・存在論を焦点として）（2011-2014）

非物質化する現代？

インターネット全盛の時代である。あらゆるものがデジタル情報化されたサイバースペースのなかでは、シャーマンの特技だった遠隔視やテレパシーやテレポートの能力が万人に共有され、人間もまた、生身の身体を脱ぎ捨てて、デジタル情報へと変身をとげたかのようである。いや「ようであった」と言うべきかもしれない。東日本大震災と福島第一原発での惨事は、この世界が物質から成り立っていること、私たち人間も物質としてこの世界に生きていることを、身に染みて体験させるものだった。

目に見えない放射性物質や捨て場のない放射性廃棄物は、「ごみ箱」のアイコンへとドラッグしても消せはしない。インターネットも物質世界の外側にあるわけではない。デジタル化された情報は「雲」のなかに霊体のように浮遊しているのではなく、ハードディスクやDVDやブルーレイディスクやサーバーや電線や光ファイバー、つまりは物質のなかに存在する。私たち人間も、病気にもなれば怪我もする、そしていずれは生体機能を停止して死に至る、この物質以外の所に居場所はない。世界と人間が物質からできているというこの事実こそが、本共同研究の原点である。

盲点だった物質性

私が1980年代にブラジルで最初に付き合ったのは、「物質性」の対極にあるような憑依霊だったが、10年ほど前からアマゾン先史土器をモデルとする土器生産の調査を始めた（古谷2005）。先史土器を追いかけて最新の考古学理論にまで手を伸ばして勉強していくと、人類学がながく放置してきたところに、思いもかけない沃野が開けていることに気づいた。「物質性」（materiality）という領域である。



アマゾン河口のマラジョー島の遺跡。雨期には大平原が水没し、マラジョーアラ文化（4世紀～14世紀）の遺跡（マウンド）は島になる。

私は以前からモノに関心はあったが、主として芸術・アートの領域だったし、「近代的芸術＝文化システム」（Modern Art-Culture System）や「モノの社会的な生」（social life of things）に関連する領域、一言で言えば、モノの意味づけが関心の的だった。意味や表象に特に関心をよせてきたのは私だけではない。20世紀後半の文化人類学は、「意味の網の目」のなかに生まれ落ち、それを身につけて生きる存在としての人間に焦点を絞ってきた。そしてその「意味の網の目」つまり文化が多数であり、しかも優劣はないこと、その探究に専念してきたのである。そこでは、物質からなるモノより、それに人間が恣意的に付与する意味のほうが主役だった。

他方、考古学の対象はモノと物質以外にない。それを通して過去の人間の営みを回復することこそが課題である。しかし、最新の考古学を勉強してみると、考古学でも実は「モノの物質性」は等閑視されてきたらしい。現代の私たちにとって物質であるものが、過去の社会の人々にとっても同じように存在していたのか、充分には論じられてこなかったのである。その理由はひとつには、発掘された遺物を（鑑識係のように）物証として扱うためには、モノの物質性が時代を越えて同じであることを前提にせざるをえないからであろう。

文化人類学に目を転じると、近年、「モノ・物」（object）を主題とする興味深い研究が現れてきている。英語で出版された著作から例を挙げれば、*Art and Agency: An Anthropological Theory* (1998)、*The Empire of Things: Regimes of Value and Material Culture* (2001)、*Thinking Through Things: Theorising Artefacts Ethnographically* (2007) などである。しかし私には、その多くはまだ「モノ」（object / thing）の研究にとどまっているように思える。さらに広げて「物質性」というパースペクティブを採用してこそ、もっと豊穡な研究領域が開けるのではないか。これが共同研究を構想した理由である。

物質性の3つの問題系

2010年に発表した「物質性的人类学に向けて」（古谷2010）で提起した議論を叩き台として、共同研究を開始したところだが、その論文では、「物質性」を3つの問題系に分けて考えてみた。第1は、「物性」（physicality）の問題系、つまり物質に備わっていて、人間との関わりのなかで発現する性質に関する問題系である。「世界は人間にとってどのような条件か」という問いが中心にある。私たちの生きる「この世界」には、宇宙の23%を占める正体不明のダークマターは別にして、4%しか占めないマターだけに限っても、地球、岩石、水、草木、有機物など、物質がひしめきあっている。人間もまた外部と物質的なやり取りをつづけている生きた物質であり、死ねば通常は腐敗が始まり、それを阻止するには、荼毘に付したり、ミイラにしたりして、腐らない別の物質に転換しなければならない。こうした「物質性」を、所与の前提としてしまうのではなく、文化人類学の考察の対象とすることを提



出土した土器片（埋葬用の甕）。マラジョアール文化の埋葬用の大甕には蛇など動物のレリーフや幾何学文様が施されている。



マラジョアール土器の複製作り。1960年代からアマゾン先史土器をモデルにして複製や土産物の土器が作られ始めた。

たり重なって、「別の世界」があり、その住人にとって世界は別の何かから成り立っているとしたら、どうだろう。前述の「物性」の問題系では、「物質性」は所与の前提とされる。しかし、物質世界は本当に普遍的なのかと問うことは、人類学の守備範囲外だろうか。私たち人類学者は「同じモノが文化によって違う意味を担う」というパースペクティブにあまりにも慣れすぎてしまっているのではないか。それはそもそも「同じモノ」として存在していないかもしれないという問いを可能にする土俵が、「存在論」の問題系なのである。

案したいのである。たとえば「モノの経年変化」。錆びる、腐る、砕ける、擦り減ることに注目してみよう。人間も世界も刻一刻変化する「流れ」(flow)のなかにあるのだから。

第2に焦点化したいのが、「感覚性」(sensuosity)の問題系である。物質世界は、身体機能である感覚を介して体験されることで人間にとって存在する。しかも人間は、能動的に世界に働きかけることによって生きており、世界と自らを加工・改変してゆく。ここでは、「人間は世界をどのように体験し、どのように働きかけるのか」が中心的な問いである。この問題については、メルロ＝ポンティの知覚論や、ギブソンの生態学的心理学や、世界内に「住まうこと」(dwelling)や「歩き回ること」(wayfaring)に照準する人類学者インゴルドの研究などが重要な手掛かりになるだろう。

人間が世界を体験し働きかける際に、五感が総合的に関与していることはたしかであるが、「ふれる・さわる」系の問題群にいままで以上に注目したいと考え、すでに、土器や偶像に言寄せて、「触知性」(tactility)の語を用いて問題提起してきた(古谷2008;2010)。たとえば、アマゾンの熱帯雨林で鳥を狙って吹き矢を構える猟師の指先と唇は、どのようにして鳥と木々と風を体験しているのか。病気の治癒を願って、巣鴨の高岩寺の洗い観音像を洗っている人は、何を洗い流しているのか。図柄も不鮮明になった踏銘を踏まれたクリシタンの足の裏は何に触れていたのか。生きるということが、物質としての人間が物質からなる世界を体験することで成り立っているなら、「感覚性」に関して人類学ができること、やらなければならないことは、まだまだたくさんある。

「物質性」の第3の領域が、「存在論」(ontology)の問題系である。私たちは、同じ地球の上に存在しているなら、同じ物質世界のなか存在しているのであり、それは「同じ世界に住んでいる」ということだと考えがちである。しかし、唯一の世界に対して複数の文化ないしは意味付与システムがあるという「多文化主義」にとどまらず、そもそも世界が複数あると考えるべきではないかという提案がなされている。この提案をまじめに受け止めてみたい。SFのような比喩を使えば、目の前にあるこの物質から構成された「この世界」にびっ

物質性の人類学の五箇条の御誓文

本共同研究は、つぎの3つの目標をもつ。①〈すすめる〉:「物質性の人類学」の鍵概念を練り上げ、理論的基礎を提示する。②〈ふかめる〉:蓄積されてきた民族誌に、「物質性」という観点から光を当てて、鉛直方向へと議論を深化させる。③〈ひろげる〉:「物質性」に関わる新しい論点に照準した多彩な具体的研究を生み出す。人類学のみならず考古学や美術史学から気鋭の方々に御参加いただいているので、私が用意した叩き台などは、四方八方から叩かれて、別の何かが生み出されることになるだろう。それこそ望むところである。何といっても世界は「生成する流れ」のなかにあるのだから。

とはいえ共同研究なので共通基盤が必要だろう。そこで五箇条の御誓文というのを考えてみた。御笑覧いただきたい。①「物質性」(materiality)の研究は、「モノ・物」(object)の研究と同じものではない。②物質世界のなか生きていく物質として人間を捉える。③「物質性」を介して人間の感覚を問い直す。④「物質性」を固定した相ではなく、「流れ」(flow)のなかで捉える。⑤ナノテクノロジーからダークマターまでを対象とする。

【参考文献】

- 古谷嘉章 2005「アマゾンの陶器生産―遺跡とグローバリゼーションのあいだで」『季刊民族学』113: 92-104。
- 2008「土器の生涯―土器片・レプリカ・触知性」『文化人類学』73(2): 221-240。
- 2010「物質性の人類学に向けて―モノ(をこえるもの)としての偶像」『社会人類学年報』36: 1-23。

ふるや よしあき

九州大学大学院比較社会文化研究院教授。専門は文化人類学。ブラジル・アマゾンを中心としたフィールドとして、憑依、土器、芸術、モダニズムなどについて考えてきた。著書に『異種混濁の近代と人類学』(人文書院2001年)、『憑依と語り』(九州大学出版会2003年)など。共訳書に、J. クリフォード『文化の窮状』(人文書院2003年)など。